東京都立中央ろう学校　学校便り　７月号　　発行　　令和６年　７月　８日

Tokyo Metropolitan　Chuo School for The Deaf

中央ウェイ　　７月号

「パリの空の下」

主幹教諭　谷村隆人

７月２６日にスポーツの祭典オリンピックが、フランス・パリで開幕します。２０２０年の東京オリンピックから３年が経ちます。私が注目している選手の一人が、アメリカ・バレーボール代表のデービッド・スミス選手です。２０１２年ロンドンオリンピックから３大会連続でアメリカ代表としてオリンピック出場を果たしている、難聴の選手です。アメリカチームの監督によれば、「デービッド・スミスルール」というものが存在し、ボールが空中にある時、デービッド選手には周りの声が聞こえないので、「彼が叫んで意思表示をしたら、そのボールはデービッドのものにする」というルールなのだそうです。この条件の下、２０１６年のリオ大会では銅メダルに輝いているのです。ＭＬＢの大谷ルールを想起させます。果たして、パリ大会にも姿を見せてくれるか、期待しています。

世界のトップ選手が集うパリは、世界で初めて公教育としてのろう学校が設立された都市でもあります。１７６０年頃、教育者であり思想家であったド・レペは、聞こえない姉妹と出会いました。二人がホームサイン（家庭の中でのみ使われる手話等）で会話をしている様子を見て、教育の可能性を見いだし、世界で初めてのろう学校設立に至ったのです。日本では１８７８（明治１１）年に京都盲唖院が開校します。初めは、それぞれの地域や家庭で使われていたホームサイン等で話すので伝わりにくかったようですが、次第に共通のコミュニケーション方法としての手話が確立されていったということです。

ここで注目したいのは、ろう学校というコミュニティの大切さです。各地に点在していた人々が一つの場所に集ったことで、言語としての手話が確立されていったということです。そして、理解し合える言葉でやり取りできるからこそ、お互いの気持ちを伝え、受け取り、悩みを相談することもでき、心と体を育んでいく環境が整うのだと考えます。また、身近なロールモデルにも出会うことができる場として、コミュニティの力は大きいのです。現在、本校には様々なコミュニケーション手段をもつ１１６名の生徒たちが通ってきています。一人一人が主人公であり、気がねなく話せる相手、趣味の合う仲間、ライバル、頼れる先輩などと出会いながら、学校生活を送っています。

２０２５年にはデフリンピックが東京で開催されます。第１回大会から数えて１００年目の記念すべき大会です。今夏のパリ大会を観る時、聴覚障害のある仲間の活躍への期待と、ろう教育の出発地点という視点、そして１年後のデフリンピックにどう関わっていきたいかという情熱をもって臨むと、より深い感動を味わえるかもしれません。